



東日本大震災の発生から4か月が経過しました。

震災の報道が日々少なくなり、被災地から遠い地域では、日常生活が戻りつつあると錯覚してしまいがちですが、避難生活を余儀なくされている方は、いまだ9万人を越えています。

約7千人もの行方不明者の捜索は鈍化しており、まだ数か月かかる見通しとなっています。

6月23日には、岩手県で東日本大震災の余震とみられる強い地震があり、盛岡市などで震度5弱を観測し、一時、岩手県沿岸に津波注意報が発表されました。

余震の不安や不便な避難生活が続く現地を支えようと大隅半島で構成される復興支援チームは、現在、第20次隊を派遣し、復興支援を行っています。

復興支援にあたった職員の声を紹介いたします。

第12次派遣 稲森洋平【社会教育課】

【5月27日～6月3日】

学校の敷地に山積みされたガレキを横目に帰宅する小学生の姿が忘れられません。また、車両警備時に、行方不明になった娘夫婦の車を捜索に来たご夫婦が車を発見したときに流した涙が震災の恐怖や悲惨さを物語っていました。

派遣期間中に給水業務が終了し復興に向けて前進を感じましたが、実際まだまだ長く険しい道なのであるということが肌身に沁みました。しかし、『人』という字は人と人が支え合って成るものです。みんなの心をひとつにがんばって大船渡市！がんばって日本！

第13次派遣 竹井政和【水道課】

【6月2日～6月9日】

がれきや被災した車を自分の目で見て、すさまじい光景に衝撃を受けました。現地では一歩踏み込んだ新たな支援として、保健師などによる心のケアも始まっていますが、支援事業を行う中で市役所職員と対応すると、表情がなく全く元気がないことに気が付きました。

被災地では、建物や車の被害だけでなく、心にも大きなダメージを負っており、被害が甚大な事から、復興に携わる自治体の職員やボランティアの方などの心のケアも必要であると感じました。

第14次派遣 岩切雄作【建設課】

【6月8日～6月15日】

震災から3か月が経過し、たくさんの方々からの支援物資のおかげで食料不足はだいぶ解消されているように感じましたが、道路以外の部分には未だ瓦礫や土砂が山積みになっていて、人手不足が続いているようでした。

被災者の方々には私達に対して明るく接していただき、辛い様子を見せませんでしたが、無理をしているんじゃないかと感じることもありました。

これからは、被災者の方々の心のケアも必要になってくると思います。

第15次派遣 宮下功大【税務課】

【6月14日～6月21日】

「復興支援ありがとう！」「私たちも頑張ります！」これは岩手県花巻空港から大船渡市に向かう道中や市内で見かけた看板や横断幕の言葉です。被災された方々の、復興したいという前向きな強い気持ちと、ボランティアの方への心遣いを感じました。

様々な国や地域から訪れていたボランティアの方々と一緒に作業する中で、ボランティアの方々の想いや行動を肌で感じ、多くのことを学びました。

被災された方々のために、自分ができることを考え、行動していきたいと思いました。

H23.6.19 撮影 第15次派遣隊

いまだ多くのガレキが残る大船渡市内

がんばろう日本